

1. 幼い頃の記憶

どこかの貴族のお屋敷の、中庭の隅っこ。

薔薇の低木の傍にある、立派な木の下で。

膝を抱えている、この国には珍しい黒髪の男の子。

お茶会から抜け出して庭園を探索していた私は、メソメソと泣く彼に気付いて足を止めた。

年の頃は私と同じくらいで、たぶん十歳に満たない。

それなのた少年があまりにも、静かに泣くから。

子供らしくない泣き方を、しているから。

私はつい気になって、声をかけてしまった。

「どうしたの？」

「……っ」

私が近付くのに気付いた少年は、慌てて膝に顔を埋めた。
問いかけに返答は無く、華奢な肩が微かに震えている。
私が構わず目の前にしゃがみ込むと、その肩が大きくビクリと跳ねた。

ただの小娘に怯えている。その様子に、私はこてりと首を傾げた。
「泣いていても分からないわ。理由を教えてちょうだい」

「……うう……っ」

子供ならではの傲慢さで早くと急かされた少年が、おずおずと顔を上げる。

露になった眩いばかりの美貌と、煌めく瞳。

彼の容姿を目にした私は、すごく驚いて目を見張った。

見たことないほどに、整った顔立ちをしている。

可愛い可愛いと褒めそやされて育ってきた私でも、見惚れてしま

うほど素晴らしさだ。

（まるで二次元ね――）

おかしなことを考えた頭が、ズキンと痛んだ。

私は頭を振って頭痛を払い、改めて少年の顔を見つめる。

すると涙に濡れているその瞳の色に、今更ながら気が付いた。

「まあ、私とお揃いねっ」

「え……？」

いつも「宝石のように美しい」と褒められる私の紫色の瞳と、似た色合いだ。

青や緑はよく見かけるけれど、この色を見つけるのは初めて。

だから私は、それが嬉しくなつて――彼を見つめながらニコニコと笑い、白くて小さな右手をギュツと両手で握った。

少年は私とお揃いの目をまんまるにして、こちらを見つめている。

しかしよくよく観察してみると、同じ紫でも少し色合いが違うよううだ。

私の瞳がグレープガーネットなら、この子の瞳はアメシスト。
ピンクがかった自分の瞳も好きだけれど、この子の濃くて鮮やかな紫も素敵だ。

そう思った私は彼の瞳を覗き込んで、うつとりと溜め息を吐いた。
やがて少年の卵のようにツルリとした白い頬が、じわじわと赤く染まっていき——やがてこちらを見つめる瞳に、熱が宿った。

「お、お揃い……」

遅れてもらえた返事に、私はそうよ！と元気に頷いた。
ぽ。ぽ。ぽ。と更に少年の頬が赤く色付く。

「私も貴方も、美しい宝石の瞳をしているの！私はグレープガーネットで、あなたはアメシスト！ふふ、とーっても素敵ねっ」

恥ずかしそうに俯く彼の手を握ったまま、私はきやらきやらと笑う。それに彼は控え目にはにかみ、おずおずと私の手を握り返した。

「あの、ぼく、■■■■■」

「えっ？」

突然、彼の声にノイズが走った。

確かここで、名前を覚えてもらったような——そんな気がする。

でも、思い出せない。

更には段々と■■■■■くんの顔に黒いモヤがかかり始め、視界がぼやけていく。

「君は……？」

愛らしいボーイソプラノがくぐもり、どんどんと世界が歪んでいく。

「私、は——」

自分の名前を教えて、それから家名を言い当てられて。

それから、それから――

何か大事なことを言われた気がするけれど。

もう、思い出せなかった。

お嬢様起きてくださいと声をかけられて、私は意識を覚醒させた。

見上げる先に、白い天井。静かに視線をずらせば、侍女がカーテンを開けている天蓋付きベッドが目に入る。

キングサイズとも呼べる広々とした寝台は見慣れたもので、白と水色の可愛らしい色合いだ。

他の家具も同じ色合いで統一され、ブランドも同じである。

「おはようございます、お嬢様」

「ええ……」

額に当てていたすらりとした手を侍女に差し出し、私は優しく起こしてもらおう。

それから床に足を下ろして寝台に腰掛け、寝起きのマツサージをしてもらった。

（久々に昔の夢を見たわね……）

窓のカーテンが開けられた明るい寝室の中で、優しい指圧にうつとりしながら夢の内容を思い出す。

確かあれは私が八歳の時の、お茶会でのことであつた。
だから——そう、今からもう十年も前の出来事になる。

そう考えると随分と前のことだ。

断片的にでも覚えているだけで凄い。

それほど強烈なインパクトを受けたということなのだろう。

「お髪を整えさせていただきます。こちらへ」

「ええ、ありがとう」

一步後ろに引いて腰を折る侍女に頷き、私は立ち上がった。

ドレッサーの前に移動し、引いてくれた椅子に座る。

「本日も麗しくございますわ、お嬢様」

「ええ……」

幾度となく耳にした褒め言葉を右から左へ流し、私はピカピカに磨かれた鏡を見やる。

そこには毎日だって褒めたくなるのも頷ける、絶世の美女がいた。腰まである寝起きにしては整いすぎているストレートの銀髪と、起き抜けとは思えないほど冴えているパツチリとした紫色の瞳。

すらりとした鼻梁と小さい鼻。

リップなど塗らずとも淡く色付いている口角の上がつたぷっくりとした桜色の唇。

何度も見ても大人びていて、美しい。

そして少しだけ目尻が吊り上がっているから――

（やっぱりきつと、悪役令嬢なのよねえ……）

幼少期にうっかり転けて、うっかり『前世の記憶』なるものを思い出してしまったのだが、何の作品に転生したのかが分からない。

悪役令嬢モノも転生令嬢モノも。

前世では漫画も小説もとにかくあれこれ手を出しまくったのだが、該当する作品が見つからないのだ。

「アリーシャお嬢様のお髪は本当に、銀糸のようでお美しいですわ」
「ええ……。ありがとう」

名前まで可愛い。だからきつと、自分は悪役令嬢と言う名のヒロインか、モノホンのヒーローだ悪役と思うのだが――前世を思い出してから十年以上経った今でも、分からない。

魔法が存在する世界なのに私は使えないし。

いいやそもそも、魔力を持って生まれる人の方が圧倒的に少ないのだけど。まあそれは置いておいて。

記憶を思い出して、よかったこともある。

「顔もお化粧などせずともとってもお可愛らしくて。貴女様の身の回りのお世話をさせていたただくことが、私の無上の喜びにございます」

「そう……」

それは美人だ美少女だとやたらめったら褒め称えられても、天狗にならずに済んだことだ。

前世の私自身の記憶は薄く、社会人且つピッカピカの処女だったことしか思い出せないが、成人した大人であったことがとにかく大きい。

お陰で両親や兄、そして使用人。はたまた交流のある貴族一家から崇め奉られるが如く称賛されても、それを少し俯瞰して見る事が出来ていた。

「確かに私は美人よね」と、一步引いて受け取ること、傲慢な高飛車令嬢になることを避けられたのだ。

(その代わり、恋愛沙汰から遠退いてしまったのだけだね……)

俯瞰して自分を見ることが出来るということは、自分に起きたことへの実感が薄いということだ。

よって熱心に口説かれても、ときめかない。

これまで沢山の殿方から縁談を申し込まれ、今でも沢山の釣書が届いているが――私はどれも、ピンと来ていなかった。

もしかしたら、モテ過ぎているのも原因かもしれない。

誰も彼も同じように私を持ち上げるから、それに飽きてしまった

のだ。非常に贅沢なことではあるのだが。

そしてその上、両親は私を溺愛している。

一人いる兄も「結婚せずにずっと家にいてくれていいからね」と言ってくれているのだ。

それが婚約者選びが難航する一因にもなっている。

だが、永遠に家族へ甘え続けるわけにもいかないだろう。

何より、兄がいつか嫁にもらう女性が、嫌がるに決まっている。

そんなこんなで貴族子女は結婚して当然、という世界で十八歳にもなつて、私は婚約者がいないのだつた。

春の社交シーズンが近付き、家族総出で領地のカントリーハウスから王都にあるタウンハウスに移ったある日。

長旅の疲れも癒えて、自室でのんびりと午後のティータイムを満

喫していた私は父に書斎へと呼び出された。

「アリーシャ、実はちよつと困ったことになってな……」

「はい？　どうなされたのですか？」

文机に着いて険しい顔をしていた父が、開口一番にそう言った。

恋愛結婚で婿入りして公爵となった父は、大変優秀なのだが些かストレスに弱い。外では無表情と言う仮面を被って隠しているものの、今は胃が痛いのか秀眉を下げてお腹を擦っていた。

何があつたのかなと私が首を傾げていれば、父は目頭を揉む。

「お前に縁談が来た。しかも、断ることは出来ない」

「え……？　断れない、って……」

我が家は公爵家である。貴族の中のトップ群なのである。

そんな家格でも断れない相手となれば、王族か他国の貴族もしくは王族しかない。

自国の王族ならば、独身であらせられるのはお二方だけ。

それはつい最近留学からご帰国なされた第二王子殿下か、四十路手前の王弟殿下か、だ。

しかし前者には長年の婚約者がいて、後者ならば浮気癖が酷くて前妻に逃げられた、という醜聞持ちだ。

前者ならばなかなか気まずく、後者ならばなかなかの絶望である。

「お相手は、第二王子殿下をと共に六年間もの間、隣国リードルに留学していた侯爵家の次男だ。護衛魔術師として長年の殿下をお守りしていた」

「ええ……？ 侯爵家のご次男様、ですか……？」

予想外な相手に私が目を真ん丸にしていると、父はひょいと右眉を上げてから頷いた。そして、説明を続ける。

「ああ。長年殿下の御身を守った功績の褒美に何が言いかと問われ

て、お前との結婚を望んだらしい」

「ええ、ご本人が私を……？」

改めて視線で「面識は」と問われるが、私は首を横に振った。

本当に、思い当たる節がないのだ。

お父様はお腹を擦りながら、重い溜め息を吐いた。

「ついさっき縁談についての連絡が来たのだが、それだけではなく早速明日会いに来るらしい。突然のことではあるが、色々と準備をしておきなさい」

「……はい、お父様」

二人して眉尻を下げて見つめ合い、それから何とも言えない空気の中で解散となった。

廊下に出れば、丁度やってきた母に呼び止められて。数人の使用人にも囲まれ、私は騒々しく衣装室へと移動したのだった。

2. 再会

その後、昼過ぎにお邪魔するとの文が改めて届いたようで、翌日の私は朝から大忙しであった。

起きてすぐに湯浴み、そして侍女達の手で全身のケアとマツサージを受ける。

推定未来の旦那様がお越しになるまでにやらなければならないことが沢山あって、せかせかと動く使用人達の空気は若干ピリついていた。

入浴を終えて自室に移動すれば、入念な保湿作業が始まる。

その間にも部屋の中では頻繁に人の出入りがあり、母も度々顔を出しては去っていった。

派手になり過ぎない程度の化粧が施され、母のチェックが入る。

それにお母様がウンと頷けばやっと朝食の時間で、気合いを入れるためかやたらと豪勢な食卓についた。

微妙な緊張に包まれた食卓はどうにも居心地が悪い。

お母様はチラチラとお父様のことを見ていて、私はそれを不思議に思った。

父の大きな溜め息と、母が父を呼ぶ声。食事の手を止めて顔を上げれば、父が苦り切った顔で目頭を揉んでいた。

あまり食が進んでいないようだ。

——まあそれは、隣でしょんぼりとしている兄もそうなのだが。

お母様がお父様を心配して、執事に胃薬を頼んでいる。

そしてそれを見て、父が母に微笑むのだ。

——大変、愛おしそうに見つめて。

今日も今日とてイチヤつく両親を前に、私は半目になる。

しかし呆れる反面、二人のおかげで朝からあった緊張感が薄れたのも確かだった。

私はお腹いっぱい、美味しい朝食を食べて。それから自室に戻ると、また慌ただしく客人をお迎えする準備に取りかかった。

* * *

件の侯爵令息様が我が家へやってきたのは、午後二時の事だった。正門前に侯爵家の家紋がついた馬車が到着したと連絡があり、屋敷内が緊張に包まれる。

私とは言えば、いつもは一步引いたところから自分に起きる事柄を受け止めているのに——今日はやたらと実感が濃い、というか。

いつもは世界と自分の間にある膜が、今は無いに等しい状況だった。

た。だからやけに、胸がドキドキする。

しかしこれはときめきからの高揚感ではない。

もしかしたらこれが、『物語』の始まりかもしれないという予感がするからだ。

女性向け西洋風作品において、『婚約』はキーとなる。

私が『悪役』なら、ここから一度上がり、そして行く行くは地へと落ちていくことになるだろう。

しかし私が『悪役令嬢』と言うポジションのヒロインなら、一度落ちてからその後は上昇のみだ。

そしてただのヒロインなら、何の杞憂もなく幸せ一直線だろう。

いや、作品によってはヒロインの方が悲惨な目に合う事もあるが。優しい世界であることを、祈るしかない。

モブと思わしき使用人達も、街の住民達も。皆一定以上の容姿を

している。前世でいう『不細工』な人なんて見たことがない。

こんなの、物語の世界でしか有り得ないに決まっている。

そしてそんな物語の中で——自分が損な役回りで無いことを願うばかりだ。だからこそ、緊張で胃がキリキリする。

静まり返る玄関フロアにて、私は母と父と共に、客人の到着を待っていた。

兄はと言えば、予定を変えれず半泣きで出掛けて行った後だ。可哀想だから、後で慰めてあげようと思う。

正門から入って広大な庭園を馬車で突き進めば、数分で正面玄関に辿り着く。よってそろそろ、玄関前に到着することだろう。

やがて、両開きである玄関ドアの前で待機していた執事が動く。

ああ、来たんだなと理解をすれば、より緊張が高まった。

例えうちより下の家格の侯爵家とは言えども。あちらは第二王子

の覚えが目出度いご令息だ。

丁重に扱わねばならず、それだけでなく我が家は、権力を笠に着ぬ善良な公爵家だ。

王家に近しくとも王家への敬意は忘れず。

どれほど高いところに立っていても民への愛は忘れず。

だから穏健派の公爵家として王家からも他の貴族からも慕われて

——いや、思考が脱線しすぎた。とにかく両開きの玄関ドアをくぐってやってきたのは、スラリと背の高い美青年であつた。

少し童顔だが、非常に整った顔立ちをしている。

こちらを見てにこりと笑う様子に、胸がドキリ——ではなく、ギクリとした。

ただ笑いかけられただけなのに、何故だか妙に落ち着かない。

「ご機嫌よう。お出迎えいただきありがとうございます」

「ご、ご機嫌よう……」

私は心の中で思った。ひつく、と――

甘い顔立ちと、痺れるほど低い美声。外見とのギャップで驚くが、すぐに私は表情を取り繕った。

しかしやっぱり、彼が放つ空気に吞まれかける。

顔立ちの整った優しそうな美青年。

それなのに、彼はどこか暗い雰囲気を纏っている。

そうまるで、前世で言う蒸し暑い夏の日の影のような――

じつとりとしていて、何とも陰鬱だった。

（この国に珍しい黒髪のせい？）

でも私の前世は日本人で、黒髪だった。

だからそんな偏見を持っているはずがない。

（じゃあ紫色の瞳……いえ、これは私と一緒に。それを暗いなんて

思うわけ――）

そこまで考えて、はたと気付く。

今父と貴族らしい挨拶を交わしている彼。その顔立ちに、昔一度だけ会った美少年の面影を見つけた――ような気がした。

「ヴェリール、様……？」

「……!!」

ついこないだ、久々に夢に出てきた少年の名前。それを何故だか今、思い出して。そっと呼んでみれば、目の前の青年がバツと勢いよくこちらを見た。

真ん丸になっている瞳がジッと私を見つめている。

（ああ、そう。この紫水晶の瞳）

ピンクがかった私の紫と違って、深みのある鮮やかな紫。

そう、この色だと確信していれば、向けられる視線がもつと熱く

なる。

居心地の悪さに身動げば、やがて彼は蕩けるように甘く笑った。

「ああ、思い出してくれただ？嬉しいよ、アリーシャ」

「ん？知り合い、だったのか……？」

喜びを露にするヴェリール様と、困惑している様子のお父様。

今思い出したのは伝えづらくて笑い返すだけに留めれば、父は何となく察して頷いてくれた。

「では積もる話もあるだろう。アリーシャ、サロンに通して差し上げなさい」

「は、はい。お父様」

キラキラと輝く紫水晶の瞳が、じっとこちらを見ている。

穴が空くほど見つめられる感覚に耐えながら、私はヴェリール様にこちらですと声をかけて、歩き出した。

間違はなくその瞳は明るく輝いている。

それなのにどうして、見つめられるとこんなにも息が詰まるのだ
ろう――

場所は変わって、窓から陽の光が差し込む明るいサロンにて。

長椅子に腰掛けている私は、テーブルを挟んだ向かいの席に座っているヴェリール様に笑いかけた。

「こちら、東の国から取り寄せたお茶です。少々クセがありますが、是非お飲みになってみてくださいませ」

侍女が淹れてくれたお茶の説明をすれば、ヴェリール様は目を細めてじっと私を見た。

ありがとうと囁く声が、離れていても腰にくる。

顔立ちで言えば可愛らしいタイプの美形なのに、どうしてそんなにも声が低いのか。

この世界にアニメがあれば、きっと声優として引っぱりだこになっ
っていたことだろう。

彼はそれくらいずば抜けた美声だった。

「……お口に合わなければ、有名店の紅茶もございます。ですので
その際はどうか仰ってくださいね」

「そうか。気遣ってくれてありがとう」

では頂くと断って、ヴェリール様は黒い手袋をした手でカップ
を持ち上げた。

そっと白磁の端に口を付け、温かな液体を口内に流し込む。ただ
それだけなのに、惚れ惚れするほど美しい。

こくりと嚙下する音と共に、ぽつりと突出した喉仏が下がる。

その光景は妙に淫靡だった。

「ん……ああ、大丈夫そうだ。スパイシーでとっても美味しいね」
私より二歳年上だという彼は、優雅に足を組んでゆったりと微笑む。

少年めいた美貌と、洗練された大人の仕草。

低く甘い声と、醸し出される陰鬱な空気。

ちぐはぐなようでいて噛み合っていて、あまりの刺激に胸がドキマギとする。

顔は小さいのに、よく見ると手は男性らしく大きめだ。

あの小さくなつて泣いていた美少年が、こんな色気が駄々漏れの青年に成長するなんて聞いていない。

そしてそんな人が私の婚約者になるなんてもつと聞いていない。

（……ハッ！待ってこの感じ、この人ラスボスとかじゃないの!?!）

良くある転生モノにいる、妙に格好いいラスボス男性。

それがこの人で、私はこの人と一緒に処刑される運命にあるのではないかと勘繰る。

「ねえ、聞いてる？」

「……うえッ？あ、は、はいっ！」

私は考えることに夢中で、つい上の空になってしまっていた。

慌てて目の前のことに集中し、私は前のめりになって彼の話を聞く。確か今は、留学中のことを話してくれていたはずだ。

荒事は起きなかったが、王子殿下に振り回されてとても大変だったとか。

護衛として腕を振るうより、殿下が婚約者様と会瀬を繰り返す手助けばかりしていたとぼやいている。

「いや、それにしても苦労話ばかりになってしまったね。僕はどう

にも女性の好む会話というものが不得手で、退屈をさせていたらすまない」

「い、いえそんな！退屈というわけではありませんわ」

上の空になっていてどの口が、と思われるかもしれないが。私は「ホホホ」と笑いながら、必死に失態を誤魔化す。

それに気付いてか気付かずか、ヴェリール様はにっこりと笑ってみせた。そしてチラリと、部屋の隅に控えている三人の侍女に視線を向ける。

「せっかくだから、君と二人きりで話がしたいな。ほら公爵閣下も、積もる話もあるだろうからと気を利かせてくださっただろう？」

「え……っ？で、でも」

いくらこれから婚約者になる予定であっても、未婚の男女が二人きりになるのは避けるべきだ。醜聞に繋がる。

だから私は躊躇ったのだが、ヴェリール様は笑顔のまま首を傾げた。

「大丈夫。何も心配はいらないさ。ねえ、そちらの侍女さん達？」

「……っ」

侍女にヴェリール様が笑いかけるのを見て、私は「あ、しまった」と咄嗟に考えた。

明るいサロンの隅で待機するのは、華やぐお年頃の女の子達。

こんな時に限って——恋に憧れ、仕えるお嬢様へ一向に春が訪れないことに唇を尖らせていた面々が揃っている。

しかも今、若い女性の中で大流行している恋愛小説のヒーローが、黒髪男性なのだ。

おかげで妙齡の女性の中で、密かに黒髪男子ブームが起きている。ヴェリール様は幼き日に黒髪だからという理由だけで忌避されて

いたのに、評価が逆転したのだ。

人というのは、何とも勝手なものだ。

「はいっ！きちんと人払いしておきます！」

三人の内で一番年上の少女が答えた。そして、今にも踊り出しそうな勢いで彼女達はドアに向かっていく。

「あっ、ま……っ！」

パタン、と閉まったドアに腰を浮かせて手を伸ばせば、シンツと室内が静まり返った。

立ち去るだけではなく、しっかりとドアを閉めてくれている。

突如やってきたピンチに私は呆然と腰を下ろし、座りなれた長椅子のクッション性を居心地悪く感じた。

「ふふ、可愛い子達だね。今度お礼の品でも送ろうか」

「……、あ……っ？」

無駄の無い動作で立ち上がったと思えば、流れるように左隣へ腰かけられた。

そしてすぐ傍から、やっとお預けから解放されたとばかりに、熱く粘着質な視線が注がれる。

「あの日、初めて君に出会った時から——僕の心はいつだって、君に夢中だ」

「あの、あ、あのお……」

これまた素晴らしくスムーズな動きで彼の腕に絡め取られ、横から抱き締められる。

思いの外厚く、硬い体。

性差を知らしめる体に密着して、心臓が忙しなく暴れ出した。

「実のところ僕は、家族との仲が最悪でね。まあ黒髪に生まれたっただけで息子を家の汚点扱いする低能な連中とは、親しく出来るは

ずもないのだから当然と言えば当然なんだけど」

「え、と……」

突然のカミングアウトと辛辣な言葉の数々に、私は返す言葉が見つかからない。

これが親しい間柄ならまだ何か軽口でも返せたのかもしれないが、二度目の——しかも約十年振りの再会で突然こんな話を聞かされて、何よりも動揺が勝っていた。

「奴らは僕にとって、今やただ血の繋がりがあつただけの役立たずの愚図だ。そして、あんな連中をどうでもいいと切り捨てることが出るようになったのは、君のおかげなんだ」

「わ、私、何もしてない……」

ガツシリとした腕に囚われたまま、知りませんと否定をすれば「そんな謙遜を」と甘く宥められる。

そんなつもりじゃないのにと首を横に振れば、恍惚とした吐息が頭上からした後、頭に顎を乗せられた。

「君は奥ゆかしくて、本当に素敵なお女性だね……。はは、僕はきちんと分かっているさ。君があの日、僕の心を救ってくれた——それは決して揺るがない、事実だと」

「……」

話が絶妙に、噛み合っていない。

この短い時間でもわかる。

この人は思い込みが激しく、執着心が強い。

でなければ約十年前に一度出会い、たった一言自分の容姿を褒めただけの相手にここまで執着しないだろう。

（もしかしたら、十年会ってなかったのもいけなかったのかも——）
会わない間に、ムクムクと気持ちが悪くなっていったのだとしたなら。

ここから私自身が訂正できるか——分からない。

何より下手に大きく拒絶したら、よくある創作でのヤンデレのよう
に、豹変してしまう可能性があった。

（私、知ってる。ヤンデレは、刺激しないのが一番なんだ……）
幸いにして現状、ちょっと——ちょっと、だけ。怖いなくと思っ
ているが、密着していても不快感は無い。

何ならめっちゃくちや良い香りがしているし、声なんか最高だ。

——ただ、常に彼からじつとりとした仄暗さを感じているだけで。
「……それで、どうかな？ 僕との婚約を受け入れてくれるだろうか」
当然こういったタイプの人が、逃げ道を用意してくれるはずもな
く。いきなり窮地に立たされた私は、目の前の上質な布地を見つめ
ながらごきゆりと喉を鳴らした。

選択を迫られているようで、選べる道は最初からひとつだけ。

お父様も、断れないと言っていた。

「は、はい……」

「ああ、よかった！もし断られたら、どうしようかなと思っていたんだよ♡」

「……っ」

ごきゆり。また喉が鳴る。ピシリと石化した体のでっぺん、頭へ彼がスリスリと頬擦りを始めた。

「これで晴れて婚約者だ。はは、は♡」

「え？あ……っ？」

私は彼に寄りかかれて、体を支えきれずにゆっくりと後ろに倒れていった。

大きな窓から燦々と陽光が差し込む明るいサロンの中で——気がつけば私は、年若い男性に長椅子へ押し倒されている。

「……っ、……っ」

信じられない状況に目が回り、言葉を失った。

——しかしそんな中でも、彼は待ってくれない。

「ああ、アリーシャ。何度この瞬間を夢見たことか」

「——んっ！」

恐ろしく整った顔立ちが目前に迫り、唇に柔らかな感触が押し当てられた。

ほんのりと冷たい、異性の唇。

咄嗟に目を瞑ってしまったのは、良かったのか悪かったのか——
何度も角度を変えて唇を重ねられて、瞼の裏で目がぐるぐると回り出す。

「はっ、ははっ♡アリーシャ……♡アリーシャ♡」

「んっ、んんっ、あ、ふうっ」

逃げ出そうにも力で敵わず、蹴くにしてもしつかりと飾り付けられたドレス姿では派手に動けず。

あっという間に足の間、右膝を突かれて、退路を絶たれる。

「やん、……ふあっ!？」

「はは、可愛い♡」

どうしようどうしようと焦っていれば、息が苦しくなつて。口を空けた瞬間にネロリと唇を一周舐められた。

私は驚いて目を開く。

するとまるで、煮詰まった砂糖のようにドロドロとしていて甘い、そんな視線に射貫かれた。

「あー、閉じてしまった。残念だ♡」

「……っ、……っ」

慌てて目を閉じれば、戯れるように唇を吸われた。

手袋をした手がゆっくりと服の上から右足を撫でている。

その感覚に、私はぶるりと震え上がった。

悪寒とも違うその感覚は——期待？興奮？それとも快感？

いずれにせよ、深く考えない方が身のためだろう。

「口、開けて？じゃないと……もつと凄いことをしてしまおうよ？」

「……は、はい……っ」

脅しと同等のことを言われて、私は恐れ、怯えた。そのはずなのだ。それなのに何故、体がゾクゾクとしているのだろうか。

心の中で目覚めた小さな兆し。

それから必死に目を逸らそうとするけれど。

どうしてかそれらはどんどんと膨らみ、主張が大きくなっていく。

「ん……♡ふ、あん……♡」

「ん、いい子だね……？」

私がおずおずと口を開くと、ヴェリール様はしつとりと私を褒められてから舌を差し込んだ。

柔らかな粘膜をぬるぬると擦られ、やがて舌に彼の舌が触れれば——大きな悦楽が生まれた。

「あ、ふあ、あっ♡♡」

こんなこと、いけないはずなのに。

それなのに私は今、この行為に心酔している。

彼の口から微かに漏れ出る吐息は色っぽく、私に絡みついてくる舌は熱い。

内腿が勝手に震え、脳内が白む。

私の足を撫でていた彼の手は今や、ゆつくりと足の付け根を撫で回していた。

それがたまらなく、気持ちがいい。

「ひゃっ」

不意に噛んで手袋を外したヴェリール様の手が、私の素肌に触れた。腿裏に当たったひんやりとした感触に思わずビクリと体を跳ねさせれば、彼はひよいと右眉を上げる。

「……ああ、ごめんね。冷たかったかな」

「は、はい……」

謝罪するように優しく左足を撫で回されて、次第に冷たさが遠退く。そして誤魔化すように口付けられれば、すぐに衝撃は薄れていった。

「あ、あ、んん……♡」

「ん、はあ……♡ふ……っ♡」

角度を変えて口付けに耽り、舌を絡め合う。

初めて感じた、他人の唾液の味。

不快に思ってもおかしくないのに、何故だか甘く感じてしまう。
それに香りだって爽やかだ。

——彼自身はとてつもなく粘着質な雰囲気を纏っているのに。不思議なものだ。

「あ、あっ♡そんな、だめ……っ♡」

「はは、どうして？ただより近付いただけだよ？」

左足の膝を背凭れに向けて押され、開脚したところへ体を差し込まれる。

下半身と下半身が重なり合い、会話を終えるなり再び唇が触れ合った。

「ん、ふあっ♡だっ、て……♡当たってる、の♡」

「……はっ♡」

捲り上げられたドレス。露になっている下着の中心に、硬いもの

がグリグリと押し当てられている。それを恥ずかしがりながら指摘すると、彼はどこか揶揄うように笑った。

「わざと当ててるに決まってるだろう？……ああもしかして、早くこれが欲しくて煽るようなことを言っているのかな？」

「ち、ちが……！ そんなわけっ」

どこか少し、馬鹿にされた気持ちになって。私は羞恥でカッと顔を赤く染め上げた。

口調が崩れたまま勢いで食い付く。

睨み付けた先で、美貌がにんまりと笑った。

彼の唇が三日月を描いている。

反抗していたはずが物騒な笑い方を前にして、背筋が凍った。

「本当に？ 僕にはただ、虚勢を張っているだけにしか見えないけれど？」

「ち、違います……！」

鼻先が触れ合うほど近くに顔を寄せられて、痺れるような低音で詰られる。

そうしているとまた腰がゾクゾクとして、怖いのに胸が高鳴ってしまう。

戸惑い、感じて。怯えて、高鳴って。怒り、興奮する。

この危ない魅力を纏った人のせいで、私の情緒はぐちゃぐちゃだ。

「ああ……下着の滑りがいいな。やっぱり、期待しているんだろう？」

「あ……っ♡あ、あ♡♡♡」

思考と同じく混乱し、錯乱した体は——次から次へと、蜜を溢す。濡れて透けているだろう白いレースの下着は、彼のトラウザーズの中で窮屈そうにしている杭に擦られて、ぬるぬると滑っていた。

「ここ。小さいながらも健気に勃起しているな」

「うあッ!? や、……ああんッ♡アッ、あっ!」

期待に膨らんでいるクリトリスを、彼の先端でスリスリと擦られる。

そして刺激を感じる度に、私の体は面白いくらいに跳ねていた。

「ふああっ♡♡ああ、やあっ♡♡んんん……っ!」

「はっ、ふふ♡♡とってもよさそうだ♡僕も、いいよ……♡」

前世ではきつと、自慰行為くらいはしたことがあっただろうが、今世ではピツカピカの箱入り娘だ。

快樂の「か」の字も知らないこの体には、布越しの刺激が丁度良かった。

「はあ、たまらない。君は最高だ、アリーシヤ」

「ひっ♡ああっ! んうう……ッ♡♡」

——いや。丁度良いどころか、良すぎたのだ。

「へんに、なるっ♡まって、やめてっ♡♡」

「悪いが、止めてはあげられないな。大人しく変になるといい♡」
膨れ上がった芯に圧を加えられながら、しつこく擦られる。

それがあまりにも気持ちが良いすぎて、まるで腰が痺れているかのようだ。

足の中心からじんわりと全身に広がる快感。

息が乱れ、甘い声が口から溢れ出す。すると外への音漏れを気にしたのか、ヴェリール様は口で私の嬌声を隠した。

「っ、ンツ♡あ、ふあ……っ♡♡」

「ん、はあ……っ♡んちゅ、ふふ♡」

口腔内をねっとり舐め回されながら、下着越しの陰核をズリスリと上下に擦られる。

彼も興奮しているのか、顔に荒い鼻息がかかっていた。

柔らかな舌は私の口内で器用に動き回り、歯の裏や粘膜まで、余すことなく舐めていく。

「ううゝゝツ♡♡♡」

気持ちいい。小さな芽を押し潰されてグリグリ圧迫されると、頭がおかしくなりそうだった。

蜜を垂らす入り口が忙しなく開閉を繰り返し、お腹の奥がきゅうつと切なく疼く。

「あ……！ンン、んう……！」

「……ああ……♡」

しつこく刺激されている内に、やがて。お腹に溜まった熱が、パチンと弾けてしまった。

私は彼の服をギュツと握って、大きな衝撃に耐える。

「可愛いね、アリーシャ。愛してる」

「あ、あ……♡あ……♡」

はしたなく開脚する足の内側を撫でられ、肌が細かく何度も跳ねる。

目尻にそっと口付けられ、愛を囁かれて。達した後の解放感のせいで、私の心の深いところへ、彼の想いが溶けて浸透してしまった。

「トロンとしているね。ああ、可愛い……。もっとしてあげよう」

「……え？」

私が上がった息を整えていると、彼は体を起こした。

最後に聞こえた言葉と彼の行動が噛み合わず首を傾げていれば、スラリと長い指が、しとどに濡れている下着に触れた。

「あ……っ？——おッ」

きゅむり♡下着を押し上げている芽を、摘ままれた。

そしてそのまま、コリコリコリッ♡と挟んだ指の腹で捏ねられる。
「あ、ま……ッ！お、お……ッ！」

コリコリ♡コリコリ♡私が仰け反って身悶えるのを尻目に、彼は皮被りの陰核を捏ねくり回す。

一瞬で脳内が真っ白に染まり、気持ちいいしか分からなくなってしまった。

「ひっ！ひ、ぁッ♡♡おおッ！」

「……良い反応♡」

悪戯にタシタシと叩かれ、カリカリと爪で搔かれて。超特急で体が、頂へと向かっていく。

「お、お、おッ♡♡きも、ちっ♡♡」

「はは、それは何より。でも声は抑えようか？」

そんなことを言われても無理だ。

だって皮から顔を出しているだろう先端をカリカリカリッ♡とひたすらに搔かれていて、どうしようもない。

「……そうだな。それじゃあ、これでも啜えていなさい」

「あ、おっ?? ああ、おーッ♡は、むう♡♡」

良い香りのするハンカチーフが首元に落とされて、私は瞠目した。小さな芽を二本の指で圧迫されて、ゾリゾリと擦られる。

その感覚に脳内を白く霞ませながら、私は律儀にハンカチーフを口内に挟じ込んだ。

「む、ぐうっ♡むくくっ♡♡ふ、ふうッ♡♡」

長々とゾリゾリされた後は、またカリカリと先端を爪で搔かれる。勝手に上下に揺れる腰は動きを阻害するように下腹部に手を当てられていた。

あまり動けない中で私は陰核を可愛がられ、様々なアプローチで

快感を得る。

「……さて、そろそろこの役に立たない下着は脱ごうか」

「ふう???…んっ!」

気付いて慌てた頃には、既にスルンと下着を脱がされていた。

膝裏に手を入れられ、大きく開脚させられる。

抵抗しようにも沢山快樂を与えられた体はくたたりと脱力していて、ろくな抵抗が出来ない。

おかげで私はドレスを着たまま大股開きとなって、びしょ濡れのあわいを曝け出してしまっていた。

「綺麗な淡い桃色だ。トロツと蕩けていて、美味しそうだね」
「くくくっっ」

身を屈めた彼に、間近でじつくりと秘すべき場所を観察されている。

今日、約十年ぶりに再開した、一度だけ会ったことがある異性。婚約者になる予定ではあるが、そんな人に女性器を見られている。あり得ないことなのに――

私の体は熱くなって、更にトロトロと蜜を溢れさせる。

「感じやすくて可愛いね。そんなに慌てなくても大丈夫。今、触ってあげよう」

「……あっ？」

くちゆりと音を立てて、少しひんやりとしたものが入り口に触れた。それは浅いところへ細い先端を潜り込ませ、お腹側をぬちぬちと擦る。

「ああ、全然平気そう……だな」

「ンッ♡んんっ！んッ♡♡おッ！」

最初だけは慎重に探っていたものの。私の中が期待でヒクついて

いると気付くなり、その異物——つまり彼の指は、いきなりズルズルと奥まで入り込んだ。

「っ、っ！んむう〜っ♡♡♡」

「すごい、熱い…♡」

膣内でぐるりと回転した指が、ピッタリと密着する内壁を擦った。その感覚はハジメテである私に快感を与え、奥のキュンキュンしている場所を更に疼かせる。

「…ッ!？」

疼いた場所に、彼の指先が霞めた。ビクリと大きく跳ねた私の体を見て、ヴェリール様が片眉を上げる。

「ん…、ここ？」

「あむッ！んんーっ♡♡ふ、んっ♡」

「ああ、やっぱり。そんなにここが良いんだ？」

ヴェリール様は長い指で張り付く内壁を満遍なく撫でながら、今しがた見つけた奥の弱点を執拗に狙う。

腰が勝手に揺れ、脳天にビリビリした刺激が流れ込む。

「あふッ！んッ！んーッ♡♡」

その上親指でクリトリスを押し潰されて、ゴリゴリと擦られていく。違った種類の快感が次から次へと押し寄せ、私は大きく開脚したまま背を反らし、ただひたすらに感じ入った。

「はふっ♡ハッ、ハッ♡んおッ♡♡♡」

「はは、気持ち良さそうだな」

いきなり抜けていったと思ったら、指が二本に増えて。ギチギチな状態でまた奥の弱点を捏ねられながら、内壁をゾリゾリとこそがれる。

「ふーっ♡ふ、くっ♡フーッ♡♡」

中の指が動けば、同時に彼の親指も揺れた。

その結果、蜜壺と一緒にクリトリスも可愛がられるのだ。

「くぼくぼ、ぐりぐり♡気持ちいい？」

「っっ♡♡♡っ、んう！んーっ♡♡」

浅いところで指を抜き差しされて、感じてしまう。

だから私は必死に首を縦に振って、その心地好い責め方を暫く続けてもらった。

「……んおッ♡♡」

入り口を愛でられる感覚に満足した頃、また根本まで指を振じ込まれた。

クリトリスをズリズリされながら最奥にある行き止まりをトントんと叩かれる。

「お、っ♡フーツ♡♡ん、ふうっ♡♡」

「痙攣、すごいな？ 美味しいって、僕の指にしゃぶりついて来てるよ」

手首を回しながら至るところを撫でられ、そこが弱点ならば集中的に刺激される。濡れすぎているのか私の穴からは今や、ぶちゅぶちゅと音が鳴っていた。

それが堪らなく恥ずかしいのに、大きすぎる快楽で塗り潰される。

「イきそう？ なら、『イク』って言いながら達するんだ。いいね？」

「ふあ、ひ♡♡んんッ！ ひ、くぅ〜ッ♡♡♡」

別に、イッても良いと許されたわけでもないのに。

誤解した私の体は、ぐちよぐちよ♡と激しく中を掻き混ぜられながら達してしまった。

それにヴェリール様は眉尻を垂らして笑う。

「はは、ははっ！……あー。たっぷりほじくったから、充分拡がっ

たね。でも、君の中はまだ物欲しそうだ」

「あ、うう……♡お……♡♡♡」

達した余韻で細かく痙攣する内壁を、優しく宥められる。

確かに彼の言う通りだ。

二本の指でたつぷりと可愛がられたはずの私のなかは、それでも物足りないとばかりに奥を疼かせている。

「……どうする？そろそろ君の侍女達が帰ってきてしまうかもしれないが——君はこれが、ほしいかな？」

「あ……」

腰を浮かせた彼が私の手を取って、トラウザーズを窮屈そうに押し上げている剛直に触れさせた。

それは硬くて、とても大きい。

きつと手に乗せたら、ずっしりと重たいことだろう。

「どうせ結婚するんだ。少しぐらいフライングしても、ね？」

「あう、あ、あ……」

未だ彼の指を咥えている蜜壺が、上の口より素直にそれを求める。彼の指はもう動いていないのに。蜜道が勝手に蠢いて、期待しているのだ。

「意気投合したからと説明して、君の部屋に案内してくれるかい？」

……ね、いいだろう？」

悪魔の囁きの如く甘い要求に、私は静かに頷いた。

* * *

カーテンを閉めた日中の寝室の、同じくカーテンを閉めた大きな寝台にて。私はお尻だけ高く上げた四つん這いの体勢で、後ろから

何度も腰を叩き付けられていた。

「いつ、ぐうぐうッ！イグッ！イツ、ぐのお……!!」

「はっ、はっ♡……あー、いい」

左右の尻たぶを握られて後孔を露にされ、その上で膣内へ極太の杭を打たれている。

この部屋に移動して既に一刻が経ったが、この調子でずっと犯され、それでいて私はただひたすらに感じ、絶頂を繰り返していた。

「おっき、いのおッ♡おっき♡♡……いぐ！」

「すごい、締まる……♡はあっ♡」

大きく張り出した先端でゴンゴンと行き止まりをノックされ、太く逞しく硬い幹で蜜道をぼりゅぼりゅと苛烈に擦られる。

クリトリスは前に回った彼の左手で入念に捏ねられ、たまに弾か
れていた。

「イツぐ♡いぐいぐいぐ……！ああッ、きもちいい!!」

挿入前には自分も初めてだと彼は言っていた。

それが嘘なのではと思えるほど、彼の抽挿は淀みない。

見事に私の弱いところを擦り上げるのだ。

（初めてだと信じられないのは、私もだけど……！）

破瓜の瞬間は確かに痛んだ。けれどそこさえ過ぎれば、あとはひたすら気持ちいいだけだ。

初体験は痛いらしいと前世の記憶がそう言っていたが、本当にただただ、気持ちが良い。

（もしかしてここ、十八禁の世界!?）

アンアンと喘ぎ、パンパンと肌を打たれながらも私は必死に考えていた。

エッチ方面のご都合主義が大きな成人向け作品なら、ハジメテの

私が乱れに乱れているのも納得できる。

——いいや寧ろ、そうであってほしい。

ただ私が淫乱なだけだなんて、認めたくはない。

「おッ♡おッ♡おく、しゅごい、のおっ♡♡」

「そうだなっ♡しゅごいところ、いっぱい突いてやるっ♡」

上半身がべしやりと倒れ伏し、体勢を保つのが辛い。

するとお尻を掴んでいた彼の手が私の腰を掴み、前後に揺さぶり始めた。

異性の力強さを如実に感じ、胸と体の奥がキュンときめく。

「ねえ、なか、出して良い？」

「んうう……！えッ!?だ、だめっ！」

鼠径部を押し付けて腰を回すヴェリール様のせいで、うっとりと感じてしまっていたが。ハッとして、私は慌てて拒絶する。

いくら結婚する予定であるとは言え、今妊娠したらまずい。

貴族の結婚には色々と準備が必要なのだ。

スムーズに話が進んだとしても、正式に夫婦となるのはきつと半年後ぐらいなるだろう。

「……ああ」

「ふあ……っ!? きゃ、あん……!」

不意に——彼の先端がピッタリとくつついている行き止まりに、熱いものがかけられた。

それは勢い良く吹き出し、小さな子宮口を擦りながら奥の小部屋へと溜まっていく。

「あっ、あっ!? なん、……ああっ!」

「ん……? ふははっ」

明らかに中に出された。

しかも中は駄目と拒絶した後、すぐに。

嫌がらせかと怒りがもたげ、私は眦を吊り上げて振り返る。

「ごめんね、質問はしたけど答えは決まっていたんだ」

「あなた、性格が悪いのではなくてっ!？」

「そうだね。自覚してる」

少年のような童顔をしている彼は、喉でクツクツと笑う。

口角は左だけが上がっていて、笑っているのにどこか歪だ。

危うさと美しさ。暗くて色っぽい。

何て酷い魅力を纏った人なのだろうと、目が回る。

「ほら、続きをしよう。まだまだ、付き合ってくれるだろう？ 未来の奥さん」

「ン……ッ♡うう、わかりました、よう……」

乙女を捧げた時点で、結婚は免れない。

唯一の懸念点は、突然「飽きた」と捨てられないかということだ。
サイコパ——いや。

少し変わっている人は、それがどんなに気に入っているものである
っても、ある日突然冷めてしまう印象がある。

もしそうなれば家格が上なのはこちらだし、どうにか責任を取っ
てもらえるように『お話』しなくてはならない。

その際に有利にことが運ぶように、純潔を散らされた証しは家族
に内緒でこっそり隠し持っておこう——

「ううんっ♡♡♡アッ！ああ……ッ♡」

真面目な思考が、再開した律動によって掻き乱される。

そしてすぐに散り散りとなり、やがて霧散した。

重い衝撃がお腹の奥に走り、脳天まで電流のような快感が走る。

「アリーシャ、愛してる。愛してる、愛してる、愛してる……」

「ぶっおッ♡♡お、おッ！あ、いっぐう♡♡♡」

カクカクと揺れる腰をガツチリと掴まれたまま、私はひたすら杭を打ち付けられる。

締まる蜜壺の中を容赦なく擦られ、抉られ――

あまりの気持ち良さに瞬く間に絶頂目前まで上がれば、早くイけとばかりに律動が速められた。

「ぶっおッ♡♡おーッ！いっく……♡んうう……ッ♡♡♡」

「……はっ、はは♡すごいな……♡」

果たして彼が「すごい」と言ったのは私の体内の感触か、それとも私の乱れ方か。

どちらかは定かではないが、とにかく気持ちが良くて仕方ないのは確かだ。

私はシーツを握り締めてビクビクとのたうつ。

今やお尻だけが上を向いていて、腰から上はベッドの上でぐしゃりと崩れていた。

寝バック寸前、といった体勢で思いの外鍛えられている体が、上から振り下ろされている。

「ふっ♡うぐっ♡イツ、た、ばっかあっ♡♡」

「そうだね。でも僕はまだ、足りないから」

まだ余韻が残っているのに容赦無く体を貪られて、締まったままの蜜道が更に収縮した。

それでも彼の腰は止まらず、ギチギチに締め付けられている怒張りがゴリユゴリユと肉ひだを捏ねる。

「あん……！ あああ……ッ♡」

ついには全身から力が抜け、私は腰を掴まれた宙ぶらりんの体勢となった。

お腹が浮いたまま、はふはふと必死に息をする。

「体勢、変えようか」

「あう、うん……♡」

彼の提案に肯定ととれるような嬌声を返し、シーツの上に体を下ろされる。

「ひゃうんっ！」

「ん……♡」

繋がったままぐるんと体を回転させられ、左向きに九十度。

そうして横になった私は左足を持ち上げられ、かと思えば彼の肩にかけられた。

真っ直ぐ伸ばした右足を跨いで彼が腰を揺らし、深まった結合のせいで私は背を反らす。

「ふ……っ♡また、中がキュンキュンしてきた、ね♡」

「あんゝ……っ♡ふかいーっ♡うう、きもちっ♡♡」
これまでよりもっと深いところまで杭が入り、ズンズンと中を突いてくれている。

擦れる場所も少し変わった。

刺激の変化に、私の体は大喜びしている。

「……ああ、ははっ♡この体勢だとここを、弄りやすくなったね♡」

「——おッ!? あんっ! あ、くりちゃっ♡♡♡」

私のものより大きな親指がぷにりっ♡とクリトリスを押し潰し、そのままグリグリと擦る。

外側からの分かりやすい快感が膣内の悦楽とリンクし、興奮が跳ね上がった。

「お、しゅご♡しゅごいっ♡おまんこ、とろけちゃうっ♡♡♡」

「はは、そうか。蕩けちゃう、か……♡はあ、く……っ♡」

触れ合う肌が汗で滑る。

そんな刺激すらもゾクゾクするほどに気持ちが良い。

彼に跨がられている右足がピンと伸びる。

このまままた、達してしまいそうだ。

「……っあ、はあっ♡」

「ん……？」

ふと様子が気になって閉じていた目を開け、ヴェリール様を仰ぎ見れば。頬を上気させた彼が、小首を傾げて視線を合わせてくる。

黒い髪は汗でべたりと肌につき、時折毛先からポタリと雫が落ちていた。

「あ、あ……！ ひんっ♡んん……！」

グリグリと刺激されるクリトリス。

痺れるような快感に目を細めても尚、私は彼を見つめ続けていた。

きっと彼は、私が見惚れているのに気付いている。

だって今、くいと左の口角が上がったのだ。

「見つめ合って、犯されるのが好きなんだ？」

「え、あっ!? ちが、あ、おッ♡♡♡ つよ♡♡♡」

左足を抱え直されたと思えば、律動が激しくなった。

太い肉杭で蜜壺の中をぐじゅぐじゅと掻き混ぜられ、頭の中も次第にぐちゃぐちゃになっていく。

「……そろそろ、また出そうだ」

「え……っ、あ！外っ、外がいい……！」

既に一度中に出されているからあまり変わらない気がするが、なるべく中出しは避けたい。

しかし焦る私とは対照的に、彼は優雅にっこりと微笑んだ。

「そん、なああッ!?」

驚愕に洩れた声が嬌声に変わる。

足のあわいに激しく腰が打ち付けられ、行き止まりに強い衝撃が繰り返し走った。

「逃がさない……はっ、はっ、絶対、に……!」

「あああッ! あッ♡おッ! はや、あんーッ!」

全力で振りたくられる彼の腰に、私はただ翻弄されていく。

ポルチオをどちゅどちゅと突かれ、子宮口が期待にパクパクと開閉する。

熱塊にピッタリ張り付く蜜道は熱く感じるほど熱心に摩擦され、耕され——快樂で思考の鈍い私の脳に、多幸感を与えた。

「出るよ、ああ、出る……!」

「あ、やっ! くり、やらあ……!」

彼の興奮が高まるのに比例して、クリトリスもめちゃくちやに擦られる。

皮を向いて芯を直接弄られれば、私はひとたまりもなく。全身を大きく痙攣させながら、歯を食い縛った。

「んう、んうぐうぐうッ!!」

「は……っ♡ぐッ♡♡くう……っ」

同じく歯を食い縛った様子である彼が、限界まで私に鼠径部を密着させて。ガチガチに硬い幹をビクビクと跳ねさせながら、灼熱の粘液を私の中に注ぐ。

子種を待ちわびていた子宮は喜んでゴクゴクと白濁を飲み下していった。

「はあ、は……っ、吸い、つかれて……うっ♡」

「ああ、まだ出てる……っ」

中は駄目なのに。いけないのに。

それなのにたっぷりと中に出されて、ゾクゾクしちゃう。

可愛い可愛いと褒めそやされ、大事にされてきたのに――

ヤンデレだろう男性に犯され、汚されてしまった。

そう実感して、とろりと心が蕩ける。

「……♡♡♡」

まだ正式に婚約者でもないのに、とんでもない事をしてしまった。

今度はそう自分に言い聞かせて、背筋に甘い痺れが走る。

穢されたことが嬉しい。

そう思っている自分に驚く半面、納得もした。

通りでいくら真剣に口説かれても、ピンと来なかったわけだ。

自分でも気付いていなかったが、私はMっ気があるらしい。

「さて、もう一回いいかな？……もちろん、中で出すけど」

ヴェリール様が、とってもクズっぽいことを言っている。

けれど私の胸は、どんな貴公子に口説かれるよりもずっと、ときめいていた。

「ふあい♡♡いっぱい出してくらさい♡♡♡」

しかしながら婚前に妊娠することだけは流石にすまず過ぎるので、誰か一人だけ侍女にこのことを打ち明けて、協力してもらおうと思った私であった。